

# ゲーテとヘーゲル

——イェーナにおける出会いと交流——

伊坂青司

一八〇七年に出版された『精神現象学』の扉に記された著者ヘーゲル（一七七〇—一八三一）の肩書は、「イェーナの哲学博士ならびに哲学教授、王立鉱物学会陪席員及び他の学会会員」となっている。何気なく見落としてしまいがちなこの肩書には、実はヘーゲルの並々ならぬ思いが込められている。

一八〇一年の冬学期からイェーナ大学で教壇に立ち始めて二、三年の間、ヘーゲルは哲学者としてまだ駆け出しで聴講者も少なく、その上無給の私講師で身分的にも不安定であった。安定した地位を得ようと、ヘーゲルは、当時ヴァイマルにあってイェーナ大学の人事権にも多大の影響力を持っていたゲーテ（一七四九—一八三二）に、昇格陳情の手紙をしたためる（一八〇四年九月二九日付）。

私どもは、大学とその構成員にとって有益でありうるすべてのことにおいて、閣下を注目しました期待をかけております。そこで私は、閣下が（人事選考の）主宰者を決定する場合には、新しい哲学教授を推挙し、私を好意と慈悲ある選考委員に推薦して載け

るよう、敢えて閣下に期待してまいりました。私は、哲学の私講師を三年間勤めて以来、少なくとも前の冬学期には、多くの聴講者に満足のゆくよう講義できたものと確信しております。私は次の冬学期には更に多くの聴講者を得るよう努力いたす所存です。

私のこれまでの学術上の仕事は、閣下のお目に掛けるにはあまりにも微々たるものでしかありません。私がこの冬学期に講義として完結しようと望んでいる仕事の目標は、哲学を純粹に学問体系として仕上げることでありますが、もしお許し載けるのであれば、それを閣下にお見せすることを承諾して載きたく存じます<sup>(1)</sup>。

ヘーゲルはゲーテに陳情するに先立って、イェーナの「鉱物学会」に陪席員として名を連ねるという周到な配慮をしている。鉱物学会は、当時の花形産業であった鉱業の隆盛を背景として、学会のなかでも最先端をなしていた。その上、ゲーテはイルメナウ鉱山再開発のための鉱山委員会議長の経歴を有し、鉱物学・地質学の研究でも名をなしていたのである。

ゲーテへの陳情の手紙が功を奏して、ヘーゲルは翌一八〇五年二月一五日付けで員外教授に昇格する。私講師という不安定な状態を一応脱したヘーゲルは、早速『精神現象学』の執筆に取り掛かり、そして「学の体系・第一部」と銘打った哲学者としてのデビュー作の扉に、晴れがましく「イエーナの哲学教授」「王立鉱物学会陪席員」の肩書を冠する。まさにゲーテは、哲学者として駆け出しの頃のヘーゲルにとって忘れることのできない影を投げ掛けたのである。

この小論は、『精神現象学』に落とされたゲーテの影を追跡調査することによって、一八〇〇年代初期のイエーナにおけるゲーテとヘーゲルの出会いと精神的交流の一端を浮き彫りにしようとするものである。

## 一

『精神現象学』の序文（本文執筆の後、最後に書き上げ一八〇七年一月に原稿発送）は、哲学体系の叙述方法から始まっているが、それとの対比で批判の槍玉に上げられているのが当時の〈解剖学〉の方法である。『精神現象学』は意外にも、〈解剖学〉批判から始まっているといっても過言ではない。ヘーゲルは最初のパラグラフのなかで次のように述べている。

解剖学とはなにか、それは言わば身体の諸部分をその死せる定在に従って観察した知識である。……学問を名のる正当な権利を

持たないそのような知識の寄せ集めでは、目的とかその普遍性について語っても、この神経とか筋肉などといった内容そのものについて語られる記述的で没概念的な語り口と何ら違わないのである。

（Phän. 9）

ヘーゲルの〈解剖学〉批判の論点は、解剖学は身体を諸部分へと分析するに止どまり、この諸部分を生ける生命全体との統一において把握するに至っていないということにある。ヘーゲルはこのような解剖学的分析方法と対比しながら、哲学体系の構成を有機的統一としての植物の生命に喩えて次のように述べている。

（植物の）諸形態の流動的本性は、それら諸形態を同時に有機的統一の諸契機となす。そこにおいては諸形態は相互に背馳しあわないだけではなくて、一方は他方と同じほど必然的であり、そしてこのような同等の必然性が初めて全体の生命を形作る。

（Phän. 10）

解剖学的方法にたいして「全体の生命」の把握を対置することのような発想は、ゲーテの〈形態学〉と軌を一にしている。ゲーテは形態学に関するそれまでの研究成果をまとめ、それに付した序文「形態学序説」（一八〇六年一〇月に書き始め翌年の初めに完成）のなかで、次のように述べている。

自然を洞察し展望するうえで、化学や解剖学がわれわれに大き

く貢献してきたことは、学問に関心を持たれる方々にはあらためて言葉を費やして想起していただくまでもない。

しかし、このような分析的な研究をたえず続けていると、多くの欠点も生じてくる。生命ある存在を分解してゆけば、たしかに諸要素に到達はできる。だが、この諸要素を集めてみたところで、もとの生命ある存在を再構成したり、生の息吹を与えることはできないのである。<sup>(3)</sup>

『精神現象学』序文と「形態学序説」が書かれた時期は、奇妙なまでに一致している。しかも両者に見られる解剖学的分析的方法にたいする批判と有機的生命をひとつの全体として構成するという発想は、みごとに照応しあっている。これは単なる偶然の一致なのであろうか。

われわれはゲーテとヘーゲルの出会いの時点までさかのぼってみると、この一致の謎を解く情況証拠を手にすることができるとも。そもゲーテとヘーゲルを最初に学問的に結び付けたのは、当時のドイツ学界に隆盛しつつあった有機体論的な「自然哲学」だったのである。

ゲーテとヘーゲルの出会いの仲立ちをしたのはシェリング（一七五五—一八五四）である。シェリングは早くも一七九七年に『自然哲学の理念』、翌年には『世界霊について』を発刊し、ドイツにおける「自然哲学」の先鞭を着けた。シェリングの「自然哲学」は、当時のドイツにまで広がりつつあった啓蒙主義的な機械論的自然観にたいする批判の急先鋒として華々しく登場したのである。

シェリングは機械論の限界を摘出し、有機的自然の領域に、機械論に代わる生命有機体という概念を中核に据えた斬新な哲学的枠組みを提供する。有機的生命論を中心に据えたシェリングの「自然哲学」の著作がゲーテの目を引き、ゲーテは電光石火の勢いで、この若い新進気鋭の哲学者をイエーナ大学へ員外教授として招聘する（一七九八年六月）。このようなゲーテの大胆な行動には、シェリングに、イエーナ大学にはびこったフィヒテの「自我哲学」の向こうを張らせ、「自然哲学」を拡張発展させようという彼の戦略があったことも否定できない。しかしそれ以上に、ゲーテのうちに発酵してきた自然研究が、シェリングの「自然哲学」のうちに哲学的立場からの支持を見いだしたといったほうがよい。

ゲーテは既に、イタリア紀行を転機として自然研究へと傾斜していた。「自然科学研究会」（イエーナ、一七九四年七月）を通じて意気投合しあったシラーに語った方法、すなわち「個々の部分に分析しないで自然ととりくみ、全体から部分にわたるようになして、活動し、生命あるものとして自然を表現する別な研究方法」<sup>(4)</sup>が、ゲーテの自然研究の基本的方向を指し示している。自然を「個々の部分に分析」するフランス流の啓蒙主義的な自然科学の方法にたいして、ゲーテは自然を「生命ある全体」として把握しようとする先見性を、早くもこの時期に示しているのである。

ゲーテという強力な支持者を得て順風満帆のシェリングが、フランクフルトで家庭教師に甘んじていたかつての学友ヘーゲルから哲学の職を求める依頼の手紙を受け取ったのは、一八〇〇年十一月のことである。シェリングの勧めで、ヘーゲルはさっそく翌年一月に

イエーナに移り、同年一〇月には教授資格請求論文「惑星の軌道について」を提出して私講師に採用される。ヘーゲルがイエーナ滞在中のゲーテを訪問したのは、私講師となった直後の一〇月二一日のことである。私講師就任の挨拶という意味をもったこの訪問にシェリングが付き添ったかどうかは不明であるが、ゲーテとヘーゲルの歴史的な出会いを橋渡ししたのがシェリングと彼の「自然哲学」であったことは疑いない。

ヘーゲルがアカデミズムにおける哲学的キャリアを惑星軌道論という自然哲学をもつて開始したこと、しかもその内容がニュートン力学への批判にあったことは、当時のヘーゲルとシェリングあるいはゲーテとの関係と無関係ではない。ヘーゲルの自然哲学に関する講義は、一八〇三／〇四年冬学期から体系性を持ち始めるが、シェリングの強い影響を窺わせるものである。

ヘーゲルが講義草稿のなかで初めて名を挙げてゲーテに言及しているのも、一八〇三／〇四年の「自然哲学」のなかの色彩論に関する箇所においてである。

分割するとは、光をその観念的な諸要素としての色彩に分割することではなくて、色彩を光と闇に分割することである。しかし色彩そのものは様々な在り方をしており、そして光と闇がひとつであるという関係である。そしてニュートンが色彩においてもまた導入した光の分解、観念的で反省的な分割を、ゲーテはこの量的な分割に変更した。そこにおいて本質は常に普遍的な光そのものである。そして光が同時に闇と対立することによって、光と闇

のこのような総合的な統一は再び単一態そのものとして認識される。<sup>(6)</sup>

ヘーゲルは、光を色彩に分割して観察するニュートンの分析的光学を批判して、光と闇との統一として「普遍的な光」そのものを捉えるという立場から、ゲーテの色彩論を明確に支持している。「色彩論」はゲーテの自然研究のなかでも、最も息長く心血を注いだものである。ゲーテは一七九〇年来の研究成果を、一八〇一年頃までに『色彩論』の構想（「教示篇」「論争篇」「歴史篇」の三部構成）としてまとめる。ヘーゲルが「自然哲学」の講義のなかで色彩論に言及した時期には、ゲーテはこの構想に基づいて『色彩論』を精力的に執筆していたのである。

シェリングの影響下に形成されてきたヘーゲルの「自然哲学」も、一八〇四／〇五年の講義草稿において、シェリングから得た有機体論を独自に発展させ、シェリングからの自立を見せ始める。シェリングは既に一八〇三年にイエーナを去っており、ヘーゲルの哲学的自立の機は熟していた。ヘーゲル哲学の発展過程は、シェリング哲学からの自立という意味を持っていただけではない。それだけには止どまらないシェリング哲学への批判という抜き差しならない事態を孕んでいたのである。

シェリング哲学は「自然哲学」から「同一哲学」に転身してゆくに従って、当初の澆刺とした生命有機体についての論述は影をひそめ、それに反比例して、生命有機体は解剖学の扱う対象になってゆく。当初シェリング自身が批判していた解剖学によって、有機体は

分析され流動的生命を失ってゆく。

これに対して、生命を分析的な解剖学の枠に閉じ込めることなく、〈生ける全体〉として把握しようという観点をあくまで貫こうとしたのは、むしろヘーゲルでありそしてゲーテであった。ヘーゲルは彼独自の生命有機体論を豊かに展開する一方、シェリングへの批判を醸成してゆき、そしてついに『精神現象学』において決定的な決裂を宣言するに至る。『精神現象学』序文の最初に現れる〈解剖学〉批判は、まさにシェリングに対しても向けられていたのである。更に言えば、序文全体を貫くシェリング批判の音調は、ヘーゲルのゲーテへの接近を証し立てているのである。

## 二

ゲーテとヘーゲルを論じる際に忘れてはならないのが、『ファウスト悲劇』第一部と『精神現象学』の関係である。近代ドイツの文学と哲学を代表する両者は、「芸術と思想の領域におけるドイツ古典主義時代最大の成果として、まさに双璧をなす」<sup>(9)</sup>二大著作として、奇しくもほぼ時を同じくして完成する。

ゲーテがファウスト伝説を素材にして、『ファウスト』初稿（ウルファウスト）を書き上げたのが一七七五年（生前は未発表。その後十五年という長い中断の後、一七九〇年に『ファウスト断片』（フラグメント）を発表、これが『ファウスト』初稿から『ファウスト悲劇』第一部への橋渡しをなすことになる。そしてシラーの熱心な勧めによって、『ファウスト悲劇』第一部を執筆し始めたのが一七

九七年、シラーの死という悲しみを乗り越えて脱稿したのが一八〇六年四月十三日のことである（一八〇八年出版）。更に続稿『ファウスト悲劇』第二部を完成したのが死の前年一八三一年のことであるから、『ファウスト』は文字通りゲーテのライフワークと言つてよい。

ヘーゲルが初めてゲーテとの面識を得て以来、訪問と私信によつてゲーテとの接触を重ねていたのは、まさに『ファウスト悲劇』第一部の執筆時期と重なっている。ヘーゲルが『精神現象学』を書き始めたのが遅くとも一八〇五年五月であり、翌〇六年十月に本文は完成しているから、ヘーゲルは完成に向かう『ファウスト悲劇』第一部の後を追いかけるようにして『精神現象学』を執筆し、そして脱稿したことになる。ヘーゲルは『精神現象学』執筆の過程で、幸運にも『ファウスト悲劇』第一部の完成間近のゲーテと接触することができたのである。

ヘーゲルは『精神現象学』の中に『ファウスト』を取り入れる。ただし『精神現象学』の執筆中に実際に読むことができたのは、一七九〇年に既に公表されていた『ファウスト断片』であつて『悲劇』第一部ではない。しかしゲーテとヘーゲルの当時の接触状況から見ても、ヘーゲルが『ファウスト悲劇』第一部の進捗状況と内容の概要についてかなりの程度情報を得ていたであろうことは、想像するに難くない。

それではヘーゲルは『ファウスト』の何に関心をそそられ、そして何を『精神現象学』に取り入れようとしたのか。

ヘーゲルは『精神現象学』の「理性」の章の中に『ファウスト』

を織り込んでいる。ヘーゲルは西欧近代の意識形態である「理性」を、世界の中に自己の姿を発見し自己の主権を確立すべく行為する意識だと考えた。「行為する理性」と名付けられた意識形態のうちに、ファウスト的意識は組み込まれている。ファウスト的意識は世界に向けて能動的に行為する近代的意識として描かれるのである。

ヘーゲルは、旧来の慣習や既成の学問を拒否して世界へと打って出ようとするファウスト的意識の在り様を次のように描いている。

自己意識は、人倫的実体と思惟の静寂な存在から己れの自立存在 (Fürsichsein) にまで自分を高めた限りにおいて、習俗と生活のおきてを、また観察によって得られた知識と理論を、まさに灰色になって消えてゆく幻として後にしている。(Phän. 198)

ここに引用された部分は、ファウストが「哲学・法学・医学・神学」という中世以来の既成の学問体系を徹底的に否認し、魔術の力をかりて牢獄のような書齋から大世界を目指して行為に赴こうとする《ファウスト》冒頭の場面が念頭に置かれている。ヘーゲルは、「己れの自立存在」という表現のうちに、個人を束縛する伝統的な因習世界(「人倫的実体」)から自己を解放し、新たに自己を自立的に形成しようとする近代的な自己意識の在り方を盛り込もうとしている。ゲーテがファウスト伝説を改鑄して形象化した人間像を、ヘーゲルは独自の哲学的概念によって捉え返しているのである。こうして、ヘーゲルの描くファウスト的自己意識は、「生命のうちに躍

りだし、純粹な個性性を実現する」(Phän. 199) という「自己実現の行為」そのものに他ならない。

《行為》こそファウスト精神の核心をなしている。ファウストがヨハネ福音書の冒頭にある「初めにロゴスありき」という文句を訳す場面で、思案した揚げ句に、最終的に「初めに行為ありき<sup>(10)</sup>」という訳に落ち着いたことは、ファウスト精神の在りようを考えうるうえで象徴的である。ヘーゲルが「行為する理性」のなかにファウスト的意識を織り込んだことは、ゲーテがファウストに託した意図に適っていると言わなければならない。

ヘーゲルは、「観察する理性」という観照的な意識の在り方から「行為する理性」という能動的な自己意識への転換という現象学的モチーフのなかに、灰色の学問生活に埋没する静的人間から動的な《行為する人間》への変身のイメージを織り込んでいる。ヘーゲルは、近代を特徴付けるこのようなファウスト的意識の自己実現の行為を「欲望の行為」と名付けている。この「欲望の行為」は意識の対象を対象的なままに放置しておくのではなく、逆に対象の「他在の、あるいは自立性の形式」を否定して、対象を自己と同じ本質として、つまり「自己性」として確認しようとする。すなわち世界のうちに自己を実現し、自己の姿を刻印しようとするのである。さてそれでは、ファウスト的自己意識の「欲望の行為」の顛末を、ヘーゲルはどのように理解しているのか。

ヘーゲルは「快楽とさだめ(Die Lust und die Nothwendigkeit)」という標題のもとに、ファウストの悲劇的運命を暗示している。ファウストの運命の糸を引いてゆくのは、メフィストフェレスであ

る。ファウストの世俗的欲望を誘いだし、彼の身の破滅を予言するメフィストフェレスの言葉を、ヘーゲルは次のように引用している。

それは人間最高の賜物である

悟性と学問を蔑み、

それは悪魔に身を委ねて

没落せざるをえない。(Phän. 199)

『ファウスト断片』から該当する箇所を引用し、比較してみよう。再度書斎に現れたメフィストフェレスの「思案なんかいっさい止めにして、まっしぐらに一緒に世界に飛び込みましょう」という誘惑の言葉に乗って、ファウストが旅支度のために書斎から出た後のメフィストフェレスの独白の部分である。

人間最高の力である／理性と学問のみを蔑み、

妖術と魔法にのみ身を委ね／偽りの精神によって強められるがよい。

そうすりゃ、おまえは無条件にわしのものだ。

運命はあいつにがむしやらに前に進む精神を授けた。

……

あいつのどんな唇の前に御馳走と飲み物を見せつけてやる。

あいつは飢渴をいやしてくれと懇願するだろうが、無駄なことだ。

そうなりや、たとえ悪魔に身を委ねなくても、

没落することは必至だろう！

この原文と『精神現象学』の引用文を比べてみると、ヘーゲルは原文を思い切って省略しているだけではなくて、「理性」を「悟性」と言い換えたり（ヘーゲルにとって否定すべきは理性ではなくて悟性でなくてはならない）、相当自由に改変していることが分かる。このような改変された文章から浮かび上がってくるのは、ヘーゲルが、古い殻を突き破って世界を目指す行為が破滅に行き着くというパラドクスを、ファウスト悲劇の核心として読み取っているということである。

「快楽とさだめ」という標題に示されているように、ヘーゲルは世俗的快楽を求めるファウストの自己意識が世のさだめの前に没落する必然性を描く。ヘーゲルがイメージしているのは、ファウストとの恋に落ちて母親を殺し、その上ファウストとの間にできた嬰兒をも殺して破滅の道をたどるグレートヒェンの悲劇である。ファウストは自己の欲望の充足を求めてグレートヒェンに近付き快楽を手に入れるが、このことが反転してファウスト自身の破滅へと至り着く。ヘーゲルはこのような二人の悲劇的運命の物語を哲学の言葉で解釈してゆく。

ヘーゲルはファウストが巻き込まれる〈行為のパラドクス〉を次のように叙述する。自己意識は「快楽の享受」、すなわち「自立的なものとして現れる意識（グレートヒェン）のうちに自己を実現したという意識」に到達する。言い換えれば「二つの自立的な自己意

識が一つであるという直観」に達する。ここで自己意識はその目的を達成したかのようなものであるが、「まさにそこにおいて」、達せられた目的が何であったのかの真相を知ることになる。つまり「目的の実現がまさに同じ目的の廃棄」となり、自己実現という「肯定的意味」が「自己自身を廃棄してしまったという否定的意味」に反転するという「さだめ」「運命」を経験する。「死せる理論から生命のうちに身を投ずる」ことが「生命喪失の意識への転落」と化し、自己意識は「空虚でよそよそしいさだめ」「死せる現実」に直面することになるのである。(Phän. 190f.)

ヘーゲルが理解するファウスト悲劇の核心は、「意識の爲した行為の結果がこの意識にとって自分の行為そのものではないという謎」にこそある。「生命を受け取ったが、そのことによってむしろ死をつかむ」という「正反対のものへの全くの飛躍」「矛盾」が自己意識を襲う。ひたすら自己の欲望を満たそうとする意識は、見えない糸にたぐりよせられるように「死」の世界へと転落してゆく。意識にはこのような運命のからくりが見えない。欲望の充足という衝動に突き動かされる自己意識にとって、自分自身のなした行為の結果が「ただ否定的で不可解な威力」として立ち現れ、自己意識はこの世の「さだめ」の前に「微塵に打ち碎かれる」のである。

ヘーゲルはファウスト悲劇のなかに、ファウスト的自我の行為が巻き込まれてゆく運命、すなわち生への希求が死の威力に打ち碎かれるというパラドクスを見て取った。ゲーテが近代的自我の欲望のおちいる陥穽をファウストという個人に形象化したのだとすれば、ヘーゲルはまさにファウストという具体的な個人に降り懸かる悲劇

的運命を素材にして、近代的自我が巻き込まれざるを得ない〈矛盾〉という近代の普遍的問題を見て取っているのである。

行為する近代的自己は他者に係わるが、それはあくまでも〈自己実現〉の爲なのである。このような場合、他者は〈自己実現〉のための手段であって、他者の自立性は認められてはいない。一方的な自己実現は他者の自立性を奪い取ってしまったざるを得ないのである。しかし逆に、他者の自立性を圧殺することは、行為する自己の存立そのものの喪失を意味している。なぜなら自己を実現する行為は、他者あつてのことだからである。こうして一方的な自己実現に止どまる限り、行為する自己は必然的に〈矛盾〉に巻き込まれざるを得ないのである。これが、自己実現を目指す近代的自己の抱えるんだ問題性であり、ヘーゲルのファウスト悲劇についての哲学的解釈の核心なのである。

ところでゲーテは、ファウスト悲劇のままには終結させることはしなかった。『ファウスト悲劇』第一部の結末は「悲劇」第二部への予兆を既に含んでいる。処刑されるべく地下牢に捕われたグレートヒェンは、天上からの「救われた」という声によって、天上へと救済されることが約束されることになり、そしてひいてはこのことがファウストの蘇生へとつながってゆく。この「救済」への方向は、既に『ファウスト断片』の最後の場面でも示されている。

『ファウスト断片』の結末を読んだヘーゲルは、現象学における自己意識の運命を悲劇的結末に終わらせはしない。むしろゲーテがファウスト救済の方向を予示したことを踏まえて、ヘーゲルは「しかし自己意識はこの喪失を即目的には超えて生きていく」(Phän.



201) というように、自己意識の新たな段階への飛躍を導き出す。現象学に登場してくる自己意識は、「絶対知」に向けて遍歴を続けるのである。

### 三

ゲーテは一八〇四年の終わりに、ディドロの遺稿『ラモーの甥』の写稿を入手したシラーから、この作のドイツ語訳を依頼された。

一読して感銘を受けたゲーテは、早くも年明けの初めから翻訳に取り掛かり、恐らくは他の執筆活動を投げうって、電光石火の勢いでこれを仕上げる。フランス本国でさえ未だ出版されていなかった幻の書の翻訳に出版社（ゲッティンゲン書店）が飛び付き、その年のうちに出版の運びとなった。こうして『ラモーの甥』は、作者の死後二〇年余りを経てドイツで日の目を見たのである。

『ラモーの甥』は、「私」とラモーの甥（彼）とのディアローグを通して、絶対王政末期のフランス社会の不条理を暴き出した風刺文学である。

ある日の午後、「私」はバレ・ロワイヤル公園を臨むカフェ・ド・ラ・レジャンスで、大作曲家ラモーの不肖の甥にあたるヘボ音楽師ジャン・フランソワ・ラモーに話しかけられる。彼はバトロンの機嫌を損じて街頭に投げ出され、身を持ち崩している。風変わりなラモーの甥は、常識では理解しがたい身振りと毒舌をもって、常識に捕われた「私」の頭を混乱に陥れることになる。

ラモーの甥との対話を通して、「私」は彼について次のように告

白せざるを得ない。「私は、これほどの才と下劣、これはどう正しい考えとそしてまた誤った考え、これはどこまでに完全な感情の倒錯、完全な破廉恥と非凡な率直さに当惑してしまった」<sup>12)</sup>。

「彼」は、自分と他人の悪行悪徳ぶりを隠すことなくおおっぴらに言い立てる。普通人々は他人の悪徳は暴きたてながら、自分の悪徳にははっぴりする偽善に陥りがちであるが、「彼」は自分の悪徳をも率直に暴き出す。この率直さは、偽善によって塗り固められたいわゆる社会通念からみれば気違い沙汰である。

「彼」は、富める者と貧しい者との絶望的な落差と世の矛盾を暴き出す。「いつでも食うものがあるとは限らないなんて、良い世の中じゃないと思いますよ。なんといまいますい世の中の仕組みなんだ。何でもありあまるほど持っている者が、しかるにまた貪欲な胃袋を持っているかと思うと、繰り返し襲ってくる空腹をもてあましながら胃袋を満たすものがなにもない者もいるなんて」<sup>13)</sup>。貪欲な食欲を下品なこととして軽蔑する上流社会の人々が逆に貪欲な胃袋をもち、最低の食欲だけでも満たそうとする者は満たされない——矛盾しているがこれが世の中のありのままの事実であり、この事実をあからさまに表現するラモーの言葉こそ真理を言い当っているのである。こうして「非凡な率直さ」をもって語るラモーの甥の言葉は、次第に「私」を魅了してゆく。

確かにラモーの甥の言動は、常識的な感覚からすれば異常であり「狂気」のようにみえる。しかし矛盾に満ちた社会体制にあっては、体制に順応しようとする常識が虚偽となり、逆に狂気が真実となる。捨て身とも言うべきラモーの甥の「狂気」は、上流社会の常

識の裏に隠された矛盾を暴き出し、真理を語り出す。精神は常識という名の自己に安らうのではなく、自己の外に脱して倒錯してこそエスプリ豊かに輝き出す。ゲーテはこのような精神の状態に「精神の疎外 (Entfremdung des Geistes)」という訳を当てた。この語句がラモアの甥の精神の在り様を端的に言い当てた。

さてゲーテ訳『ラモアの甥』が出版されるや、『精神現象学』執筆中のヘーゲルはすぐさまこれを読み、「精神」と名付けた章の一節 (自分から疎外された精神) にラモアの甥の精神を織り込む。『精神現象学』という書物には、ほとんどといってよいほど引用文が見られないのであるが、この一節に限っては、ゲーテの翻訳文が敢えて引用符を付して抜き出されている (もともとヘーゲルの引用は、正確なものではなく相当に改変されている)。ヘーゲルは、『ラモアの甥』の核心部分を次のように引用している。

(ラモアの甥の) 言葉は「英知と狂気のたわごととして、下劣とそれにおとらぬ才との、正しい考えと間違った考えとの、感情の全き転倒、完全な破廉恥と非凡な率直さ並びに真理との混ぜものとして」現れる。「このような調子すべてに没入することを、そして最も甚だしい軽蔑と非難から最高の感嘆と感動に至るまでの感覚の全スケールを駆け上がり下りたりすること、禁じえぬであろう。嘲笑すべき動作も感嘆と感動のうちに溶解されてしまふであろう。」 (Phän. 284)

ヘーゲルが『ラモアの甥』から読み取ったのは、その精神の「転

倒性」とそうであるが故の「真理性」である。ラモアの甥が語る言葉の内容は、「あらゆる概念と実在の転倒」である。ヘーゲルはラモアの甥の精神を、人格としての同一性が完全に分裂し、絶えず反対のものへと転倒してゆくものとして捉えた。ヘーゲルは正にこのような精神の転倒こそが、真実を表現するのだと考えた。なぜなら、実在する現実世界が分裂し転倒しているのだとすれば、その世界を身をもって表現する人格とその言葉もまた分裂し、転倒せざるを得ないからである。

ヘーゲルは革命前夜のフランス社会の転倒した現実を「疎外」という概念によって捉えた。

(フランス社会の) 精神は現実においても思想においても絶対的で普遍的な転倒と疎外である。……この世界で経験されることは、権力と富という現実的な実在も、それらの善と悪という限定された概念も、あるいは善と悪の意識つまり高貴と下賤の意識も、いずれも真理ではない。そうではなくて、これらすべての契機はむしろ互いに転倒して一方が他方になり、すべてがそれ自身の反対なのである。 (Phän. 282)

国家権力が善で富が悪、あるいは高貴な意識 (貴族) が善で下賤な意識 (民衆) が悪であるという旧来の常識的な図式は、社会構造の転倒によってひっくり返り、逆転して権力が悪で富が善となり、高貴な意識は悪で下賤な意識が善となる。ヘーゲルはラモアの甥こそ、この転倒を一身に担って分裂した、転換期の象徴的人物だと捉

えたのである。

ヘーゲルは、「精神の疎外」というゲーテの訳語に、旧体制の崩壊から近代世界が生まれ出る転換期の精神構造の象徴的表現を見いだした。『ラモーの甥』の翻訳のなかでたった一度だけ用いられた言葉が、転換期の人間像についてのヘーゲルのイメージを膨らませてゆく。ヘーゲルは、ラモーの甥のイメージを手掛かりにして、「疎外」の内実を現実世界の普遍的在り方として摘出した。ゲーテ訳『ラモーの甥』の出版がもう少し遅ければ、『精神現象学』の「精神」の章は、「疎外」についての豊かな記述を欠いたものになっていたに違いないのである。

## おわりに

『精神現象学』は、ヘーゲル自身がそれまで遍歴し、目の当たりにしてきた同時代の思想を「意識の諸形態」として総覧しようというものである。そこには、哲学体系を形成しようとするヘーゲルに消し難い影を投げ掛けた諸思想が、後の完成された哲学体系に比べてみると、比較的生々しい姿で現れている。

そのなかでも、哲学者として出発したばかりのヘーゲルに忘れ難い痕跡を残したゲーテの存在は、『精神現象学』を解釈するうえで特筆すべきものである。『精神現象学』に現れたゲーテは、単に社交辞令の対象といった程度の存在ではなくて、ヘーゲルの哲学思想そのものに深く影響を及ぼしている。

『精神現象学』に現れるゲーテは、決して調和のとれた古典主義

的な人物ではない。《ファウスト》にみられる悲劇的人間は、近代的自己の巻き込まれる矛盾を示していた。ラモーの甥は、近代社会への転換期に現れる矛盾に満ちた人間を象徴していた。どちらにも、既存の社会体制に静的に安住する人間ではなくて、むしろ既存の体制を否定する押さえがたい衝動に衝き動かされ、矛盾と不調和に彩られた人間像が示されている。ヘーゲルはこのような人間像に執着するゲーテにこそ、深い共感を示したのである。

ヘーゲルは『精神現象学』が発刊になった一八〇七年にイエーナを後にして、その後バンベルク、ニュルンベルク、ハイデルベルクと移住し、一八一八年以降周知のようにベルリン大学教授としてドイツ哲学界に名を馳せるにいたる。一八二七年の秋ヘーゲルは、若き日の思い出深いゲーテをヴァイマルに訪問し、ゲーテは茶話を催して、既に円熟期に入った哲学者を歓待した。この会に同席したエッカーマンは、ゲーテがこの哲学者を日ごろから高く評価していることを知っていた。

エッカーマンの報告によると、話題は「弁証法の本質」に及び、ヘーゲルはそれを「だれの心にも宿っている矛盾の精神を法則化」したものであると説明している。ここで言われている「矛盾の精神」とは、形式論理的な意味でのものではなくて、広く人間精神に潜むパラドクスとでもいうべきものである。ヘーゲルは弁証法を、人間の精神を超えた客観的な法則とは考えていなかった。ゲーテにたいして弁証法を語るヘーゲルには、かつて『精神現象学』執筆のときにゲーテ本人から与えられた生々しいイメージが彷彿としていたに違いないのである。

## 註

本文中の『精神現象学』からの引用は、G. W. F. Hegel Gesamte Werke, Hrsg. von der Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften, Bd. 9: PHÄNOMENOLOGIE DES GEISTES; Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1980. を用い、頁数に略号 Phän. を付す。

- (1) Briefe an Goethe, Bd. I (Briefe der Jahre 1764-1808) Christian Wegner Verlag Hamburg, 1965. S. 423 f.
- (2) 当時の鉱物学、地質学の状況については、次の論文を参照。柴田陽弘「ゲーテと石の王国—ゲーテの地質学」『モルフオロギア』第五号、ナカニシヤ出版、一九八三年所収。
- (3) 『ゲーテ全集』第十四巻、潮出版社、一九八〇年、四三頁。
- (4) P. ベールナー『ゲーテ』桜井正寅訳、理想社、一九八三年、一〇三頁。
- (5) ヘーゲルのニュートンに対する批判については、次の論文を参照。門倉正美「ヘーゲルのニュートン批判」(加藤尚武編『ヘーゲル読本』法政大学出版局、一九八七年所収)
- (6) G. W. F. Hegel Gesamte Werke, Hrsg. von der Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften, Bd. 6: JENAER SYSTEMENTWÜRFE I; Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1975. S. 83.
- (7) ゲーテが色彩をへ光と闇から捉えていたことについて、

次の文言から分かる。「色彩をつくり出すためには、光と闇、明と暗、あるいはもっと普遍的な公式を用いると、光と光ならざるものとが要求される」(『ゲーテ 自然と象徴——自然科学論集——』高橋義人編訳・前田富士男訳、富山房百科文庫、一九八四年、五六頁)。「色彩は光を欠いてはありえない。光は「闇とならんで」色彩を生み出すもうひとつの原因であり、色彩の出現の基礎をなし、物を輝かせ、色彩を現前させる強い力だからである」(同二五七頁)。

- (8) シェリングに対するヘーゲルの有機体論の関係については、拙稿「ヘーゲルの〈有機体〉論—ドイッ観念論における自然哲学の「断面」」(『人文学研究所報』No 19、神奈川大学人文学研究所、一九八五年所収)を参照。
- (9) 『ルカーチ著作集 4 ゲーテとその時代』白水社、一九八六年、一六七頁。
- (10) Goethes Werke, Bd. III, Christian Wegner Verlag, Hamburg, 1962. S. 44.
- (11) Goethes Faust, Gesamtausgabe, Im Insel-Verlag, 1962. S. 74f.
- (12) Diderot: Rameau's Neffe; übersetzt von Goethe, Philipp Reclam Jun. Stuttgart, S. 21.
- (13) ibid. S. 91.
- (14) エッカーマン『ゲーテとの対話』(上)、山下肇訳、岩波書店、一九八四年、一九四頁。

(いさか・せいし 哲学)